

JSCP ニュースレター

7

No.07 2015年2月発行 編集・発行・日本コミュニティ心理学会広報委員会

第17回大会を終えて

大会長 村本 邦子 (立命館大学)

2014年6月7日(土)～8日(日)、立命館大学衣笠キャンパス創思館にて、「コミュニティ・エンパワメント」をテーマに、日本コミュニティ心理学会第17回大会を開催しました。大会企画シンポジウム「東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント」、研究委員会企画シンポジウム「コミュニティ心理学とTEM の出会いー その出会いは幸福な径路をたどるのか」、倫理委員会企画講演「コミュニティ心理学と倫理」のほか、口頭発表9本、ポスター発表18本、自主シンポジウム5本と盛りだくさんで、前日6日(金)には、プレ・ワークショップ「フォトボイスとフェミニスト・アクション・リサーチー プラクティスをめざして」を実施しました。大会参加者は147名、プレ・ワークショップ参加者は18名、スタッフや関係者を合わせると200名を超える参加者がありました。

思えば10年前にも第7回大会を引き受けましたが、あの頃と比べれば、私自身も年を重ね、少しは落ち着いて大会を開催することができたかなと思います。何より、今回は、「せつかくやるなら自分自身が楽しもう!」と想って引き受けましたので、存分に楽しませて頂きました。3月、娘と一緒に鞍馬山までポスター用の写真を撮りに行くことに始まり、かねてよりやってみたかったフェミニスト・リサーチのワークショップを実現させ、「東北フォトボイス・プロジェクト」や立命館でやっている「東日本・家族応援プロジェクト」家族漫画のパネル展示もすることができました。今回、手話通訳のご要望に応えることができたことも嬉しいことでした。大会実行委員会、学会理事のみなさまを始め、本当にたくさんのみなさまのお世話になりました。至らぬご迷惑をおかけした部分もあったかと思いますが、コミュニティ心理学らしく、暖かいつながりのなかで大会を無事、やり遂げることができたことに心より感謝しています。

名誉会員である星野命先生には、懇親会初めに、ありあまるお褒めの言葉を頂き、後日、手書きで清書された原稿をお送り頂きました。会員のみなさまへのメッセージでもありますことから、今回、ニュースレターでご紹介させて頂くことにしました。大会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、倫理委員会企画講演につきましても、後日、学会誌に掲載される予定になっております。ご参加が過わなかったみなさまにも、是非、大会の様子をご想像頂き、ながしかの学びにつなげて頂けたら幸いです。本当にありがとうございました。

役立つキーワード 杉浦 久美子 (久里浜医療センター)

Multi-Disciplinary Team (MDT) : 多職種医療チーム

多職種医療チーム(以下、MDT)は医療観察法病棟において機能している多職種連携を基本としたチームである。

●特徴

- ① 医師・看護師・作業療法士・臨床心理技術者・精神保健福祉士+対象者(注)本人で構成されている。
- ② チーム員のそれぞれの専門的な視点を生かしながら、対象者の治療や社会復帰のための多角的な援助を行う。
- ③ 入院している対象者一名ごとにチーム。
- ④ 対象者本人もチームの一員として、自らの治療に主体的に取り組む。
- ⑤ 治療の責任と権限については、特定の職種や個人が強いというわけではなく対等の責任を負う。

- ⑥ 対象者一人につき月に一度開催される会議でMDTと対象者が一堂に会し、病棟生活の課題や治療の進捗具合を共有する。

臨床心理技術者が主に担当する部分は、心理アセスメント、認知行動療法、アンガーマネジメントプログラム、内省プログラム、再発予防グループ、疾病教育等である。医療観察法病棟では多くの人員配置やこのようなMDTの連携により、これまでの精神科医療では実施が難しかった手厚い対応が可能となっている。

(注: 対象者: 精神障がいにより心神喪失または心神耗弱の状態、殺人、放火、強盗、強姦、強制わいせつ、傷害の未遂を含む重大な他害行為を行った者)

第17回大会 懇親会より 星野先生のご挨拶

前頁の村本先生からのご報告にもありました通り、平成26年6月7日（土）に立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館地階レストラン「カルム」にて開催されました日本コミュニティ心理学会第17回大会懇親会において、本学会の名誉会員である星野命先生よりご挨拶を頂きました。ここに星野先生ご本人直筆の原稿を紹介させていただきます。

星野先生原稿 P 1

二〇一四年 京都立命館大学における
日本コミュニティ心理学会第17回大会懇親会にて
大会長村本邦子先生へのお礼の言葉と、
参加者へのお礼の言葉
星野 命
このたびの大会のテーマの設定をはじめと
して会場の設営、そして他の企画の実行に努
められておられることに会員を代表して心か
ら厚くお礼を申し上げます。
特に第一日の六月七日（土）の午後行われ
た「大会企画シンポジウム「震災後のコミュニ
ティ・エンパワーメント」の企画・司会を直
接担当され、三人の話題提供者の、それぞれ
がユニークで、また臨場感を傾けた内容と語
って下さったことに、大会長の「人選の妙しき
感じ」とりましました。私共
この学会が設立され発足した一九九九年より
以前の「コミュニティ心理学シンポジウム時
代（一九七五年より毎年一回開催）の同志の
一人であった田中富士夫先生は既にこの世を
去られ、安藤延天・山本和郎・西先生は病いの
ためご欠席とあうて寂しさを禁じ得ません

P.1

星野先生原稿 P 2

たに学会発足当時の第一世代の、新雅子
箕口雅博・高島克子の皆さん（本欄）と交わり
からも大会に参加下さり下さり下さり下さり
いでます。
これからの第三、第四世代に当たる会員の
方々に期待し、お預けした（？）は、現代
心理学、社会福祉学、教育学等の分野に所属
しておられるとしても、コミュニティ・ア
プローチと「エコロジカル・アプローチ」の
重要性と突進性を生かして、大自然をバック
にしつゝ、個人、家族、組織・地域社会のす
べてを包括した実践と研究を推進して頂きた
いこととです。
本大会のワークショップ、シンポジウムで
は、新しく創造的を研究法加いくつも紹介
されました。フットボイス、フリースペース、ギ
ャロネル、特に橋渡し強化、物語り始める人
の発見と聞き取り、家族漫画パネルなど
私にとり活用さばかることは、ゾクゾクす
る体験になりそうである、残念なことに「時間
が足りない、不可能なこととしてあきらまされては

P.2

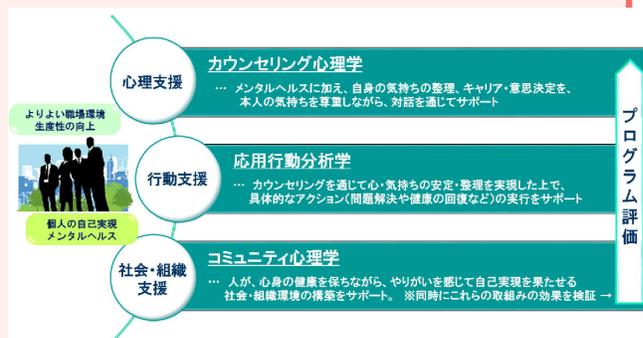
コミュニティ心理学を実践できる職場の紹介

中小企業を対象とした心理支援サービス：学生の学びの場の創出との両立

大林裕司（心理支援ネットワーク心PLUS）

私は、職場のメンタルヘルス対策を行なう専門機関（いわゆるEAP）での勤務を通じて、まだ十分とはいえない中小企業へのサービス展開にチャレンジしたいと考えようになりました。そんな時、明治学院大学の井上孝代先生より、「今後のフィールドとして注目されるであろう産業臨床領域で活躍できる人材の育成の場をつくりたい」というお話をいただきました。そして、この2つの課題を組み合わせた事業ができたらと考え、2013年8月に、井上先生・立教大学の箕口雅博先生・西部文理大学の安田節之先生の協力を得て（いずれも本学会の理事の先生方です）、"心PLUS"を設立しました。

当法人の一番の特徴は、企業へのサービス提供に際して、インターンシップとして学生を受け入れて事業に協力してもらうことで、中小企業にとってハードルの一つとなっているサービス費用を抑えながら、学生には関わりの場（例えば、打合せや研修・コンサルテーションへの同行、カウンセリングへの陪席など）や研究のフィールドを提供する点にあり



まず（これは自分自身が学生時代にこのような場を数多く与えていただいた経験がもとになっています）。そして、支援の枠組みとして、コミュニティ心理学の「個人と環境との相互作用」の視点から、「心理支援」「行動支援」「環境（組織）支援」をコンセプトとし、取組みに対する評価の視点（プログラム評価）も踏まえた活動を目指しています。

※W EBサイト：<http://www.kokoro-plus.or.jp/>

若手学会員研究・実践奨励受賞者のその後&受賞のポイント

山本耕太（立教大学大学院・富士見乳児院）

私は、平成19年度にこの奨励賞をいただきました。受賞の知らせを聞いた時は、自分のことのように思えず、実感が沸かなかったくらい、驚きました。それと同時に大変嬉しく、励みにもなりました。

当時は大学院の修士課程に通いながら、教育相談所に勤めておりました。その教育相談所では、個別の面接やコンサルテーション以外に、ボランティアを活用した不登校支援プログラムの担当をしていたのですが、前任者が形を作り、成果を出していたにもかかわらず、その自治体の教育行政の中ではきちんと評価されていませんでした。私はそれを引き継ぎ、前任者からアドバイスをもらいながら、実践で日々悪戦苦闘を繰り返しておりました。その折、当時徐々に浸透し始めていた「プログラム評価」を知り、これを用いてなにか出来ないかと思い、プログラム評価のデザインを考えました。そして、せっかくだらうのであればなんとか研究にしてみよう、研究にするなら奨励賞に応募してみよう、というある意味安易な考えで応募してみました。

受賞後は、プログラム運営をしながらデータを集め、デザインの練り直しなども行っただけですが、私の力不足により、思うような成果は得られませんでした。実践研究やプログラム評価研究の難しさを痛感し、この賞をいただきながらその研究が思ったように実を結ばず、自分自身の力不足を大いに反省いたしました。

その後私は、資格のために修士課程に入り直すなどの紆余曲折を経て、現在は児童福祉領域に辿り着き、乳児院で実践活動を行っております。また、博士課程にも在籍しており、非常勤講師の掛け持ちもしております。研究者としてまだまだ半人前であり、そもそもまだ学生の私が、受賞のポイントを述べることは本当に僭越なのですが、唯一私でも言えることは「とにかく応募してみることに」だと思います。当時は良くも悪くも今以上に何も知らず、だからこそこの賞に応募出来たように思います。今応募しようと考えても、色々と考えて躊躇してしまう気がいたします。しかし、この賞をいただいたことは現在の活動全般の励みになっており、その時ご指導いただいた多くの先生方のお言葉は私の指針になっています。幸い、日本コミュニティ心理学会の若手奨励賞は、落選しても再度応募可能ですし、選考委員の先生方からコメントもいただけます。当たり前のことではありますが、とにかくやってみることに、このことを私は今も大切に活動しております。

健康……、という言葉がおそらく無縁になって久しくなっている私に健康法というものがあるのか。そんな疑問を持ちながら、改めてここ数年、健康面などで気を使ったことを思い出そうとしたのですが、あまり浮かんできません。

食生活で何かに気を使っているとか、節制をしているとは自慢できるようなものではなく、お酒も「それなりに」嗜みますし、美味しいものがあれば、しっかりと味わっています。それはそれで、精神衛生上はいいのかも知れませんが、体重などに跳ね返って来そうなのですが、大事にならずに済んでいます。

おそらく、体型等がある程度維持できているのは、体を動かす事でバランスをとっているから……だと思えます。もともと、長い距離を歩くことが苦にならないので、時間に余裕のある時は電車の1駅分を歩いたり、自宅から片道5キロぐらいの範囲であれば自転車で移動したりと、交通費を浮かせるのと一石二鳥のような形で、自分の足で動くことを増やしています。おかげさまで、極端な体重増加などもなく、おそらくほぼ健康な状態を維持できているようです。

これからの寒い時期、道中のコンビニなどで温かいものの誘惑に負けないように、気をつけていきたいと思えます。
(駿河台大学 平野貴大)

日本コミュニティ心理学会第18回大会概要

日程：2015年6月20日(土)～21日(日)

会場：法政大学多摩キャンパス

(<http://www.hoseiac.jp/gaiyo/campus/tama/>)

大会長：丹羽郁夫(法政大学)

副大会長：萩原豪人

事務局長：平野貴大

編集後記

本号のリリースに際しては、諸般の事情により当初予定よりも大幅に遅れることとなってしまいました。早々に原稿を頂戴いたしました先生方には深くお詫び申し上げます。

さて、今回のニューズレターも読み応えあるものになったのではないかと思います。コミュニティ心理学会の歩み、コミュニティ心理学者の基本姿勢から、コミュニティ心理学実践のための新たな職域、新たな概念まで、多少大げさですがコミュニティ心理学の過去から未来まで一望できる内容となりました。広報委員会からも、次回大会を支えることとなった平野先生に寄稿頂きました。村本先生には貴重な原稿ファイルをご提供頂き心より感謝申し上げます。ニューズレターに関するご意見、掲載ご希望の原稿につきましては、広報委員会のメールアドレスまでお知らせください。また、メーリングリスト送信先メールアドレスの変更は会員用マイページにてお手続きをお願いいたします。

(北翔大学 小坂守孝)

2013年11月1日の朝、この年創立100周年を迎えた上智大学四谷キャンパスは騒然としていた。この日が創立記念日であり学生にとっては学園祭の初日であったが(ちなみに紹介者の誕生日でもある)、多数の警察官や警備員、そして報道関係者がいつもの混雑ぶりを増幅させていた。この日を狙って毒物を仕掛けたという脅迫状が大学に届いたのである。作者の藤巻氏は上智大学の卒業生で、彼に恨みを抱いた犯人(同年12月15日逮捕)が彼の母校を脅迫しようとしたというのが、不可解ではあったが、その理由とされた。

この騒ぎで紹介者は「黒子のバスケ」というマンガの存在を知る。そして第1巻を読んでみた。主人公の名は「黒子テツヤ」。誠凛高校バスケット部に所属。身長168cm、体重57kg。バスケの選手としてはパワーもスピードも平均以下。なのに、すごい!彼の相棒はアメリカ帰りの火神大我。身長190cm、体重82kg。黒子くんは、この火神くんを際立たせる「影」になると決心する。「僕が勝つ」とは言わない。「火神くんを、そしてチームを優勝させる」と宣言する。とにかく存在感が薄い。すぐそこにいても誰も気づかない。試合中はパスの中継役に徹する。つまり、パス回しに特化した選手であり、まさに「黒子」なのだ。彼はこう言う。「中学時代は勝つことが全てだった。5人の個人技だけで3年連続全国制覇を成し遂げた(ちなみに、彼はそこの6番目の選手、シックスマンだった)。でも、そこには「チーム」がなかった。何か大切なものが欠落していた」

コミュニティ心理学者は黒子であれ、と説いたのは他ならない山本和郎先生である。先生は、問題の解決には専門家の指示に従うのが良いという「専門家中心主義」を批判し、コミュニティの問題はメンバー自身が解決するべきであり、専門家は脇役または黒子の役割を担うべきであるとした(山本, 1986, 68-69ページ)。コンサルタントとして、コミュニティのキーパーソンの相談にのるという例が一つの典型であろう。しかし、黒子としての専門性をうまく発揮するには理論だけではなく、それなりの経験に基づいた技法が必要である。「黒子のバスケ」には、その秘訣が描かれている。

このマンガは第30巻まで続く大ベストセラーになっている。その全てを読んだわけではないので、ここに紹介するのは無責任なのかもしれない。しかし紹介者は、スーパーマンが主人公ではなく、スーパーマンを支える人物が主人公という発想に惹かれてしまった。少なくともバスケットボールが好きな人なら大いに楽しめるであろう(ちなみに女子マネージャーの相田リコがかわいい)。久田満(上智大学)

日本コミュニティ心理学会ニューズレター 第7号

2015年(平成27年)2月5日発行

- ・発行 日本コミュニティ心理学会
- ・編集 日本コミュニティ心理学会広報委員会
(小坂守孝・杉浦久美子・平野貴大・丹羽郁夫)
- ・本学会ホームページURL
<http://jscp1998.jp/>
- ・広報委員会メールアドレス publicity@jscp1998.jp